様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 20 年 6 月 22 日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８３３０１７８
研究課題名（和文）　日本の学校風土・慣習の形成・展開と現代的再編課題 ― その社会史・社会学的研究
研究課題名（英文）　Forming and Changing Process of School Climate and School Custom in Japan: Its social history and sociological character

研究代表者
久冨　善之（KUDOMI YOSHIYUKI）
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：４００７８９５２

研究成果の概要：　学校には他の場所にない独特の「雰囲気や慣習」、「事柄への意味づけ」がある。これらは総じて学校文化と呼べる。本研究は、兵庫県豊岡市の豊岡小学校という一つの学校を対象に、明治６年創立以来、しだいに地域社会に学校が根付く中で、学校文化が形成され、また時代を通じて再編されて来た、その学校内部での過程、地域社会との関係、学校の担い手である教師層の活動の関与を、社会史と社会学的文化論の視角で明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
２００７年度	2,900,000	870,000	3,770,000
２００８年度	3,100,000	930,000	4,030,000
年度			
総　計	9,500,000	2,850,000	12,350,000

研究分野：　社会科学
科研費の分科・細目：　教育学・教育社会学
キーワード：　学校文化、学校慣行、教員社会、教員文化、学校行事、杞柳産業、ペダゴジー

１．研究開始当初の背景
　日本の学校文化には、いくつも独特さがある。今日、それらの通用性が低下しているために、そこにある種の「学校の行き詰まり」が起こっているのではないか、と考えた。そういうズレの性格解明のため、一つの小学校の歴史を具体的事例として、それぞれの学校慣行やその意味づけが、言葉としても活動としても、どのように形成され、また再編されて来たかを追跡したいと考え、資料的にそういう追跡の可能性がある小学校を選定した。

２．研究の目的
（１）日本の学校文化の性格を、一つの小学校を事例に歴史的に把握すること。
（２）学校文化の形成や再編が、地域社会に学校制度がどのように根付くのか、という過程での「学校と地域との交流関係」のどのような展開と関連したものだったかを明らかにする。また、そのような「交流関係」の調整の担い手である学校教員層の活動や文化を追究する。
（３）学校文化の今日的再編課題の性格を探り、そこに現代学校改革の一側面を捉える。

３．研究の方法
（１）豊岡小学校の「学校文書」の保存状況を確認して、プライバシーに配慮して閲覧可

能なものを130年余について通して閲覧、年代別に整理して、そこから学校文化の内的側面を読み取る。
（２）それぞれの時代についての「学校体験」を、教師文書や、当時教師・児童だった人へのインタビューを通じて探る。また、東井義雄・森垣修といった、この小学校に在籍した代表的実践家教師のライフヒストリー、その前後・周辺を含む地域教育実践活動の歴史資料を収集・分析する。
（３）地域の代表的地場産業である杞柳生産・販売に関わる職人・商人層の残した「日記・手紙」、杞柳産業の歴史に関する地域資料によって、その子育て・人間形成、技術・技能形成にとっての、学校への意味づけを明らかにして、学校文化の外的側面をつかむ。

４．研究成果
３年間の追究を通じて、およそ以下の６点の研究成果を得ることができた。
（１）「学校文化の社会史的性格」を解明：「学校文化」という概念は、かなり融通無碍に使われて来たが、本研究を通じて、「学校文化」が、
①、国の法制度によってだけ決まるものではなく、
②、また学校側からの地域社会の制度的組み込みによる一方向的形成物でもなく、
③、学校に関わる諸々の個人（教師、子ども、父母、住民）、集団、組織、機構などの事実上の参画を通した一つの「創造的で生きた作品」として、ある地域社会に、またある学校の内・外に形成され、意味を発揮し、再編もされるものである
という、「学校文化の社会史的性格」を、研究全体として明らかにしたことが、第一の成果である。
（２）「学校文書の 130 余年通読・整理から読み取れるもの」の事例的明示：
130余年の間、皆学制近代学校を体現していた一小学校の「学校文書」とりわけ教師が記述した『学校日誌』・『学校沿革誌』の通読と領域的・時代的整理を通じて、
①、学校制度が子ども・父母・地域の生活の中に浸透する過程、就学率・通学率・卒業率・進学率、その中での「小学校」通学の意味づけ変化、という点を通史的につかんだこと、
②、教師たちの身体・行動・集団関係・文化や、養成と免許・職制が教員個人・集団にとって持った意味、そのような事柄が定着して働く姿、またそれらの時代変化を浮かび上がらせたこと、
③、児童のやや非日常的活動である「行事」（儀式的、文化的、保健・体育的、など）が、それぞれの時期にどのように生れ、内容変化し、その働きを発揮し、また弱め、意味づけを変化させて来たかということ、
④、校地・校舎の確保・拡張や、災害を越える復旧を通して、どれだけ地域社会によって支えられ、また地域によって「場」として活用もされて来たかという点、
⑤、小学校の地域社会での位置づけが、ある小学校の制度変化や国からの「権威づけ」に影響し、（中等教育進学率だけでなく）実業補習教育系統の学校創立にも関わり、教員社会での人事異動上の意味づけにも関与すること、
⑥、「運動会」が当初は、今日の「遠足」的なものであったところから、「遠足」と「運動会」とが、活動としても言葉としても明確に区別される慣習が確立すること、また学年・学級の呼び方もその意味と共に流動的な段階から、ある儀礼的な呼び方が定着し、学校内の集団秩序も安定するなど、『学校日誌』の中の言葉の意味変遷が、学校活動・学校文化と相即的関係にあること、
といったようないくつもの点を明らかにする成果をあげることで、「学校文書の 130 余年通読・整理から読み取れるもの」を、一つのケース・スタディとして具体的に示すことができた、これが第二の成果である。
（３）「教員社会・教員文化・教育実践活動の自生的形成と展開、その地域的特性」を解明：
①、学校文化を学校内部で形成・継承し、またある要素を地域の他の学校にも広め、あるいは子ども・父母・地域とのズレ・矛盾に直面してこれを調整・再編する、そのような働きの最前線に立つのは、学校の中心的担い手である教師たちに他ならないこと、
②、ただし、教師も個人としてこれらの課題に振り回されているのではなく、学校内教員集団や地域教員社会を形成し、またそこに独特の「行動様式＝意味づけ」としての教員文化を創り出し、そうやって学校文化の作品的創造・再創造に、個人的・集団的に参加していること、
③、そういう過程で、教科の授業や学級経営を工夫・研究・交流する、教員集団・教員社会内の官製的・半官製的・純民間的な、いくつもの組織・団体が生れ、それらが総体として「研究熱心さを特徴とする日本的教員文化」を創出したこと、
④、そこに、「地域教育実践活動」と呼ぶべきものが、この但馬地域では 1920 年代後半から「生活綴方」を中核とする独特の特徴ある姿で出現したこと。それは戦前から戦後へと屈折を経ながら、教員社会の中に伝統として継承されたこと、
⑤、その地域的潮流の中から、全国的に名前を知られる東井義雄や森垣修という実践家が登場し、そのライフヒストリーと実践展開の中に、これまでの①～④が、ある「典型

的に体現された」とも言える姿で登場すること、

といった諸点を明らかにすることで、総じてこの地域での「教員社会・教員文化・教育実践活動の自生的形成と展開、その地域的特性」の解明に、新たな一歩を踏み出すことができた、これが第三の成果である。

（４）「地域の杞柳産業、その職人・商人層の仕事と子育てにとっての＜学校＞の意味」の究明：

①、この地域の地場産業として興隆した杞柳産業、その分業・協業の構造、生産工程の特徴、そしてカバン産業への転換、などを地域資料とインタビューで改めて確認したこと、

②、それと共に、そういう材料調達から生産工程、そこでの分業・協業、そして製品の広い販売過程、それら様々の仕事が、学校教育とどの点で関係し、どの点では無関係ないし背反するものだったかを、それに携わった「商人や職人にとっての＜学校＞の意味」として、究明したこと、

③、その点で、２つのケースを追跡し、当事者へのライフヒストリー・インタビューを素材として、とりわけ一つのケースでは、それに加えて当事者の父親の子育て期の日記、当事者と家族との往復の手紙、という貴重な資料を入手して、それらを加えた複数の資料によって、②の点をより詳細かつ具体的に分析したこと

といったことを通して、「地域の杞柳産業、その職人・商人層の仕事と子育てにとっての＜学校＞の意味」という、地域と学校との交流・往復関係という学校文化の外的側面を、ケース・スタディによって明らかにしたことが、第四の成果である。

（５）「学校文化の社会史研究の、現代学校改革論への示唆」の提出：

以上の成果を踏まえた「まとめ」として、現在の日本で課題になっている「学校の行き詰まりと改革」に関して、「学校文化の社会史」という角度から、すでに働きを弱めて、再編が求められている学校の空間的・時間的・活動的・集団関係的な秩序の組み換えを、たとえば学級編成問題や文化行事などの点について、いくつかの具体的視角を提示できたことが、「学校文化の社会史」研究の、現代学校改革論への示唆として、第五の成果である。

（６）科研費研究「中間報告書」・「最終報告書」を通じた、一定の「まとめ」と研究結果の各段階での発信と各種交流の実現：

以上、（１）～（５）のような研究成果については、研究報告書を２年度目と最終年度に作成した。

①、2007 年度末に『学校文化の形成と地域社会』（科研費研究「中間報告書」、総ページ数 321）を作成・刊行したことで、一つは、地域研究、教師実践研究、学校文書研究と３つに分かれて進めて来た研究過程から、執筆された報告書の３部を通して、それらを「学校文化の社会史」としての相互関連を再考する機会となり、二つは、調査現地の何人ものインフォーマントに中間報告を送付したことで、調査成果の相互確認と共に、情報の詳細化と追加情報の提供が得られたこと、

②、2009 年３月という研究期間の終了時点で科研費研究最終報告書『学校文化の形成・展開と地域社会：　豊岡小学校 100 余年と但馬地域教育実践活動の社会史的・文化論的・社会学的解明』（総ページ数 421）を、研究代表者・研究分担者・連携研究者・研究協力者の全員 13 名の共同執筆で作成することができた。そこでは、３部構成の順序を中間報告とは変えて、１部・学校文書研究、２部・教師教育実践活動研究、３部・地域産業従事層と学校の研究、とし、それに「学校文化の社会史」と「現代学校改革論への示唆」という「結び」をつけ、学校文書の整理の資料と、ライフヒストリー・インタビューの一部分及び教育実践経過の整理とを資料として掲載して編集したこと、

③、この最終報告書の執筆・刊行と配布を通して、調査研究過程で多大な協力をいただいた現地インフォーマントに、３年間の「研究成果」として届けると共に、学校文化研究者・学校制度史研究者の数十人に報告書を謹呈することで、その批判を仰ぐことができた。

それらを通して、東京のある出版社によって、この研究結果を今年中に出版することになり、（１）～（５）に述べた科研費研究の成果を、まとまった形で社会的に発信する機会を得られた。①～③という内・外の交流を含めて、これらの全体と、今後予定される出版とは、「科研費研究の成果を、まとめて世に問う」という意味で、本研究の第六の成果であると言うことができる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）

１、仲嶺政光、「現代社会における大学開放の展望」、教育実践研究（大阪教育大学教職教育研究開発センター）、第３号、2009 年、pp.15-23、査読なし

２、前田晶子、「教師と教育言説：　東井義雄の「いのち」概念をめぐって」、鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要、18 号、2008 年、pp.123-129、査読なし

３、久冨善之、「「学級」という集団構造と「いじめ」問題」、＜教育と社会＞研究、18 号、2008 年、pp. 18-27、査読なし

４、Fumi Tomari & Yoshiyuki Kudomi, School culture in Japan(Part 2), Hitotsubashi Journal of Social Studies, Vol.40 No.1, July 2008, pp.1-16　査読なし
５、Hajime Kimura, Status, virtue and duty: a historical perspective on the occupational culture of teachers in Japan, Pedagogy, Culture & Society, Vol.15 No.2, July 2007, pp.175-184,　査読あり
６、Fumi Tomari & Yoshiyuki Kudomi, The school culture of junior secondary school in Japan, Hitotsubashi Journal of Social Studies, Vol.39 No.1, July 2007, pp.1-17 査読なし
７、前田晶子、「東井義雄の戦前における「主体性」の追求」、鹿児島子ども研究センター研究報告、12 号、2006 年、pp.51-63、査読なし
８、木村元、「漁村における草創期の新制中学校」、＜教育と社会＞研究、16 号、2006 年、pp.12-17、査読なし
９、久冨善之、「「地域社会と学校」の文化論的課題」、＜教育と社会＞研究、16 号、2006 年、pp.29-38、査読なし
10、Yutaka Hasegawa & Yoshiyuki Kudomi, Teachers' professional identities and their occupational culture, Hitotsubashi Journal of Social Studies, Vol.38 No.1, July 2006, pp.1-22　査読なし

〔図書〕（計６件）
１、片桐芳雄・木村元編、『教育から見る日本の社会と歴史』、八千代出版、2008 年、総ページ数 240
２、久冨善之、「学校という制度と時間・空間」、久冨善之・長谷川裕編著、『教育社会学』、学文社、2008 年、１章、pp.24-40
３、福島裕敏、「学校教師とはどのような存在か」、久冨善之・長谷川裕編著、『教育社会学』、学文社、2008 年、４章、pp.75-91
４、山田哲也、「子育て・教育をめぐる社会空間・エージェントの歴史的変容と今日・未来」、久冨善之・長谷川裕編著、『教育社会学』、学文社、2008 年、７章、pp.127-143
５、久冨善之、「教育改革時代の学校と教師の社会学」、久冨善之・長谷川裕編著、『教育社会学』、学文社、2008 年、10 章、pp.179-195
６、木村元、「東井義雄の戦中・戦後経験とペダゴジー：　戦後教育実践に刻んだもの」、三谷孝編『戦争と民衆 ― 戦争体験を問い直す』旬報社、2008 年、pp.50-82

６．研究組織
(1)研究代表者
久冨　善之（KUDOMI YOSHIYUKI）
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：40078952

(2)研究分担者
木村　元(KIMURA　HAJIME)
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：60225050

前田　晶子(MAEDA　AKIKO)
鹿児島大学・教育学部・准教授
研究者番号：10347081

福島　裕敏(FUKUSHIMA HIROTOSHI)
弘前大学・教育学部・准教授
研究者番号：40400121

山田　哲也(YAMADA TETSUYA)
大阪大学・大学院人間科学研究科・准教授
研究者番号：10375214

(2006 年度のみ)
仲嶺　政光(NAKAMINE MASAMITSU)
富山大学・地域連携推進機構・専任講師
研究者番号：00303032

(3)連携研究者
(2007－2008 年度)
仲嶺　政光(NAKAMINE MASAMITSU)
富山大学・地域連携推進機構・専任講師
研究者番号：00303032

なお３年度間を通じた研究協力者は、以下の７名である。
・　泊　史(TOMARI FUMI)
一橋大学・大学院社会学研究科・博士課程院生
・　眞原　里美(MAHARA SATOMI)
京都精華大学・教養教育センター・常勤講師
・　大西　公恵(OONISHI KIMIE)
一橋大学・大学院社会学研究科・博士課程院生
・　本田　伊克(HONDA YOSHIKATSU)
一橋大学・大学院社会学研究科・博士課程院生
・　篠田　一希（SHINODA KAZUKI)
一橋大学・大学院社会学研究科・博士課程院生
・　富澤　知佳子(TOMIZAWA CHIKAKO)
日本教育史・研究者
・　高橋　幸恵(TAKAHASHI SACHIE)
民間教育研究活動・研究者